

小学校 特別活動 部会

部会長名 市場小学校 校長 井上 憲治

実践者名 川崎東小学校 教諭 大久保利詔

1 研究主題

児童一人一人が楽しく豊かな学級や学校の生活を創る特別活動

～指導技術の向上に生かす学級活動授業参観の視点から設計する学級活動の実際～

2 主題設定の理由

(1) 特別活動に求められる教育的な意義から

① 学力向上の観点から

OECDによる「生徒の学習到達度調査（PISA2003）」では、数学的リテラシー得点について、学校質問紙・生徒質問紙の結果及び調査問題との関連から、例外なく「学級の雰囲気が良い程、得点が高くなる」、「生徒のモラルが高い程、得点が高くなる」と報告している。

a 良好な学級の雰囲気は特別活動でつくられる

学級の良好な雰囲気は、学級担任と児童、児童相互の信頼関係や人間関係が望ましい状態にある時につくられるということです。このような望ましい信頼関係や人間関係を形成する働きは特別活動に多様にある。

b 児童に培わなければならない能力や態度（学力の要素）

教育基本法の第30条には、「小学校における教育は、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と規定されている。このことから児童に培わなければならない学力の要素は、「①基礎的・基本的な知識及び技能」「② ①を活用して課題を解決する思考力、判断力、表現力」「③主体的に学習に取り組む態度」になる。

小学校学習指導要領解説特別活動編の21ページには、特別活動の教育的意義として、「エ 各教科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間などの学習に対して、興味・関心を高める活動である。また、逆に、各教科等で培われた能力などが総合・発展される活動でもある。」と示されている。学級会は、教師がリードする教科の話合いとは異なり、児童が自分たちで立てた活動計画に沿って話合いを進める。この能力は、国語科をはじめとする各教科等で培った話し合う力が総合・発展されなければ発揮できない。また、特別活動の各活動・学校行事で培われた自主的・実践的な態度も主体的に学習に取り組む態度に結びつく。

c 意欲的、計画的な学習態度の形成に関する学習をする学級活動(2)

学級活動(2)の共通事項「ア 希望や目標をもって生きる態度の形成」では、意欲的、計画的な学習態度の形成に関する学習する。日ごろの自分の学習に対する課題をつかみ、課題が生じる原因を探り、課題解決の方法を見付け、自分なりの解決方法を自己決定する学習を通して、学習に集中して取り組んだり、積極的に自分の考えを発表したり、友だちと協力して学習を進めたりするなどの学習をすることができる。また、学力の向上には欠かせない「家庭学習の進め方」についても学習することができる。例えば、「自分に合った家庭学習法の発見」という題材で、家庭学習の課題を解決するよりよい方法を話し合い、話し合ったことを

もとに自分の家庭学習を自己決定するという学習をする。

このように、特別活動は、学習に対する健全な態度を形成する具体的な学習の「場や時間」でもある。

2 主題の意味

(1) 児童一人一人が豊かな学級や学校の生活を創るとは

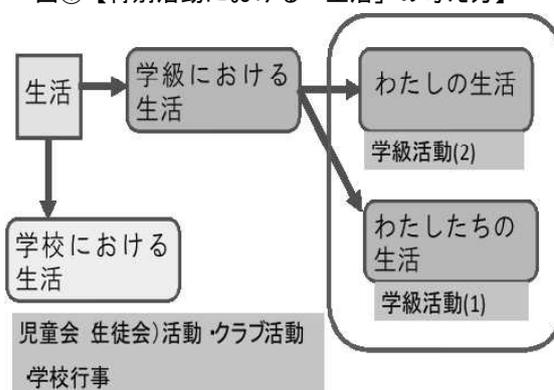
児童が創る豊かな学級や学校の生活は、児童の自発的、自治的な活動を通して創られる。ここでいう学級生活（時に学校生活づくりもある）は、主として学級活動「(1)学級や学校の生活づくり」によって創られる。また、よりよい学校生活は、児童会活動の代表委員会や委員会活動を中心に創られる。

児童が創る豊かな学級や学校の生活は、学習指導要に示された、低学年の「仲良く助け合う学級生活」、中学年の「協力し合う楽しい学級生活」、高学年の「信頼し支え合う楽しく豊かな学級生活」が目安となる。

ただし、教育課程上では学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全」において創る健全な生活態度がある。

このことから、児童がつくる「生活」は、図①に示すように、学級における生活と、学校における生活があり、学級における生活は学級活動(2)でつくる「わたしの生活」と、学級活動(1)でつくる「わたしたちの生活」がある。前述したように、これらの生活は、児童の自発的、自治的な活動によってつくられるものである。

図①【特別活動における「生活」の考え方】



(2) 児童一人一人が豊かな学級や学校の生活を創る特別活動とは

特別活動の各活動・学校行事の特質を踏まえた実践を通して、楽しく豊かな学級や学校の生活を創ることであり、学級の生活には主に学級活動(1)で創る「わたしたちの生活」と、主に学級活動(2)で創る「わたしの生活」がある。

① 特別活動の特質

- a 集団活動であること。
 - ※ 集団活動とは、何のために活動するのかという活動目標や目標達成のための方法や手段、役割分担などをみんなで共通理解している集団による活動である。
- b 自主的な活動であること。
 - ※ 自主的な活動とは、自ら楽しく豊かな学級や学校の生活をつくりたいという課題意識を持って、自分たちで問題を見つれたり話し合ったり実践したりする活動である。
- c 実践的な活動であること。
 - ※ 実践的な活動とは、楽しく豊かな学級や学校の生活づくりのための諸問題を話し合ったり、話し合いで決めたことに友だちと協力して取り組んだりするなどの具体的な活動を実践することある。

② 学級活動「(1)学級や学校の生活づくり」の特質

全学年の各学級ごとに、児童たちの自発的、自治的な活動として学級会を組織し、学級生活（時には学校生活）上の諸問題について話し合い、計画を立て、実際の活動を行うとともに、必要とされる学級内の仕事を分担して処理する活動を行う。

③ 学級活動「(2)日常の生活や学習への適応及び健康安全」の特質

児童の現在の生活において起こっている（または近い将来において起こることが予想される）適応指導、生徒指導（生活指導）などの諸問題の中で、特に指導を必要とする「一定の現象面の問題」を取り上げ、一単位時間を充てて、即効性のある授業を学級ごとに教師が意図的・計画的に行う指導である。

④ 児童会活動の特質

全校の児童で組織する児童会において、児童の自発的、自治的な活動を通して学校生活の充実と向上のための諸問題を話し合い、協力してその解決を図るさまざまな活動を行うものである。そして、その運営は主として高学年の児童が行うこととなる。

⑤ クラブ活動の特質

学年・学級の所属を離れて、主として第4学年以上の同好の児童が組織する各種のクラブにおいて、児童の自発的、自治的な活動として共通の興味・関心を追求する活動を行う。

⑥ 学校行事の特質

学校生活に秩序と変化を与え、日常の学習や活動の成果を総合的に発揮させて、学校生活の充実と発展を図り、集団への所属感を深めさせるための、学校または学年の児童を対象とする体験的な集団活動であり、学校が計画的に行うものである。

※ ①『特別活動リーフレット』：国立教育政策研究所 ②～⑥『特別活動指導の基本構想』：青木孝頼（文溪堂）参照

3 副主題の意味

(1) 指導に生かす学級活動授業参観の視点とは

学級活動（1）を指導する際には、上述したように特別活動の特質を生かしながら育てなければならない様々な子どもたちの姿がある。それらを見とり自分の指導技術向上を目指して行くには、授業を参観する際、授業のどこを見るのかが重要になってくる。その前提として、授業を否定的視点で観察しないという事を述べておきたい。

学級会は子どもたちがつくりあげる話合いであるから、こうすればもっと子どもたちの力を引き出せ、さらによい話合いに発展させられるであろうというプラスの指導観点を見落としてしまうことになるからである。また、授業者に「よりよい学級会にするには」という視点でアドバイスをする際にも、また拝見した授業から自分の授業へのプラス材料にするためにも肯定的視点にたちながら、批判的思考力をもって授業観察に望むことが必要であると考えられる。

4 研究の目標

(1) 『学級内に支持的風土が醸成されているか』を見とる

よりよい学級、より楽しい学級づくりを目指す話合いを行うキーワードは『みんなで』である。どの子の発言も大切にされ、みんなで支え合う雰囲気の中で話合いが進行されなければならない。『みんなと一緒にやるならできそうだ』を実現させるためには支持的な風土が醸成されていることが不可欠である。

【どのように見るか】

- ・ 友達の発言をしっかりと聞きとっているか。
- ・ 友達の発言に対して、笑ったりバカにしたりする態度はないか。
- ・ 反対意見を受け入れる雰囲気があるか。
- ・ 賛成多数の中でも反対意見を出せるか。
- ・ 自分の主張だけに終始した発言になっていないか。
- ・ 訥々とでも自分の言葉を使い、長いセンテンスで考えを述べているか。
- ・ 司会が困っている時に、自然なアドバイスができているか。

(2) 『みんなでひとつの考えをつくり出そうとしているか』を見とる

学級会は否定を繰り返しながら結論を導き出すものではなく、お互いの意見のもつよさ（価値）を見つけ合いそれを組み合わせながら合意形成を図るものである。学級のグレードアップを目指す話合いを行うには、友達の考えを肯定的に受け止めつつ、よりよい内容に高めていく必要がある。言い換えるならば、安易な折り合いを付けない話合いにもつながると考えるからでもある。

【どのように見るか】

- ・ 「反対です」という言葉から自分の発言をスタートさせていないか。
- ・ 「～さんの気持ちも分かるけれど・・・」と、まず相手の考えを認めた上でしっかり自分の考えを伝えようとしているか。
- ・ 友達の考えのよさを見つけ、それを生かしつつ自分の考えを述べているか。
- ・ 価値ある発言を選択し、その方向に話合いを進めようとしているか。
- ・ 計画委員（司会）が話し合う手順を理解していて進行が子どもになっているか。
- ・ 司会が学級会をコントロールしているか。
- ・ 1時間しっかり集中してみんなで考えあっているか。
- ・ 実践にどう結びつく話合いなのか。
- ・ 子どものための学級会になっているか。

(3) 『提案理由と学級目標に帰着した発言や進行』を見とる

ひとつの議題に向けてみんなで話し合う内容が分かっている。つまり提案理由が学級全体にどれくらい浸透しているか、学級全体の切実な問題ととらえているかを見ることができる。また、その議題に向けて知恵を出し合いながらリアリティのある話合いが展開されているかも見分けることができる。

【どのように見るか】

- ・ 「提案理由にもあるように～」という内容が発言の中にあるか。
- ・ 「学級目標の～につながる～」というような内容が発言の中にあるか。
- ・ 自分の体験を元に生きた自分の言葉（知恵）として考えを伝えているか。
- ・ 生活経験からその子なりのわけ（生活に根付いた知恵）が言えているか。

- ・枕（つなぎ言葉）を使いながら次の発言をしているか。
- ・ノートに書いてある内容を発表したにとどまっていないか。
- ・話型だけにこだわった話合いに終始していないか。
- ・「いいです」「いいと思います」などの決まった反応だけになっていないか。

(4)『学級活動に関する掲示物等が整備されているか』を見とる

学級活動には子どもたちが自分たちで自治的に行ういくつかの内容がある。それをより活性化して行わせるには、自由に利用できたり、参考にできたりするものが身近にある条件整備が不可欠である。この条件整備がよりよい、より楽しい学級づくりを進めて行く意欲と実践力を育むことにつながるからである。

【どのように見るか】

- ・学級目標がきちんと掲示されているか（子どもの言葉で綴られた）学級活動の一週間の計画が掲示されているか。
- ・計画委員のメンバーとその活動期間が掲示されているか。
- ・学級会の進め方が掲示されているか。
- ・基本的な話型が掲示してあるか。
- ・学級活動コーナーが整備されているか。
- ・子ども達が自由に使える、物品が整備されているか。
- ・過去の児童の計画表や記録ノートがいつでも見られる状況を整備しているか。
- ・輪番の代表委員メンバーの予定が掲示されているか。
- ・学級活動のあしあとが目に見える記録として残されているか。
- ・子どもたちの手で書かれた掲示物が多いか。

(5)『本時の学級会に関する資料が掲示されているか』を見とる

学級会を円滑に進めるために、クラス全員が納得した上であらかじめ決めておく内容がいくつかある。その内容が全員の目に触れる形できちんと示されていることで、みんなの中に浸透し45分の時間内に話合いを集結させる重要な手立てとなるからである。

【どのように見るか】

- ・本時学級会までの足取りがきちんと見える掲示物があるか。
- ・本時の学級会ノートが作成されているか。
- ・本時の児童の計画表が作成されているか。
- ・本時の話合いに関する「決まっていること」が掲示され学級全体に示されているか。
- ・本時の議題解決に必要なアンケート結果等が掲示されているか。
- ・本時の学級会で選択されなかったものの処理をどうするかが決まっていて、その内容が掲示されているか。
- ・次回の学級活動の予定が掲示してあるか。

4 研究の仮説

学級活動授業参観の視点を目標に掲げた(1)～(5)のように見とりながら指導技術の向上に生かして、授業設計を行うならば、特別活動の特質や発達の段階を踏まえた話し合い活動の充実が図られ、楽しく豊かな学級の生活を創り出そうとする自主的、実践的な態度を身に付けた児童が育つであろう。

5 みんなの心がひとつになる高学年学級集会活動の実際

(1) はじめに

5、6年生におけるみんなの心がひとつになる集会(イベント)活動としては、みんなで楽しむことを主体とした「ハロウィンパーティやクリスマス集会」、クラス編成が行われた直後や担任が替わった時に行う「どうぞよろしく」という主旨の集会、運動会や学習発表会などの成功を祝う集会等があるが、本稿では集会を通してクラスの絆が強まるとともに、よりよいクラス、より楽しいクラスを目指していこうとする意欲も高まる意義のある集会を紹介したいと思う。

(2) このような集会を展開する前提

よりよい学級(学年)づくりのためには学級活動を中核にすえた学級(学年)経営の指針がのぞまれる。充実した学級活動を展開していけば以下に挙げるような学級風土が醸成されるものである。

- ・支持的な風土の醸成(みんなで支え合う人間関係)
- ・現状に満足せずに常にひとつ上のよりよい学級、より楽しい学級を目指そうとする総意。
- ・友達の話をよく聞き取り、その話の趣旨をふまえた上で自分の考えを述べる話し合いの基礎。
- ・「みんなでひとつの考えをつくり出すのだ」という学級会(話し合い)の原点の理解。
- ・安易な折り合いに走ることなく、それぞれの内容がもつ意義やよさに着目して決定していく話し合い活動の実践。(ゲーム性がもつ意義への着目)
- ・賛成多数の中でも、他の意義に着目した発言ができるとともに、賛成者もより意義ある内容に転じていこうとする積極的選択能力。
- ・「学級活動の時間は週に1回だけある、私たちの時間なのだ」という認識。

(3) 学年全体で取り組むための教師の『しかけ』

クラス内だけで行う集会ではなく学年全体をまきこんだ取り組みに進化させるためには、どのクラスからもクラスマッチの種目を提案させて、学年の話し合い(学年学級会)を開きその種目を決定するのである。

このような教師主導ではないクラスマッチを企画するには、学年開き当初からの教師による『しかけ』が必要になる。それは、学年全体が同レベルで様々な種目への経験をもたせておくことが必要であり、学級開き当初から、子どもたちとのかかわりの中でさりげなく様々な種目を経験させておく事が不可欠となる。しかも、個人の能力だけが際立つのではなく、高い能力をもつ個人へも友達への声かけやアシストを奨励しその行動を賞賛しながら、どの子も満足感が得られるような活動を仕組むのである。

(4) 経験させてきた種目

- ・大縄跳び系(みんなでジャンプ、8の字連続への挑戦) ドッジボール系(ボール数の変更による変速ドッジ、王様ドッジ、フリスビーを使ったドッジビー)、スウェーデンリレー、全員ムカデ競争、野球系(コーン野球、テニスラケット野球、フッ

トベースボール、ハンドベースボール) サッカー等

多くの経験を積ませておくことが、このクラスマッチの種目の取捨選択を行う場合に優れた先行経験となり、自分の経験を生かした発言ができるようになるのである。学級全員が同じ経験値をもっているのであるから、子どもたちみんなが納得できる内容を選択することができるのである。(これがとても重要)

これらの先行経験が生きた知恵として働くには、常に活動後に振り返りを行うことが重要になる。ただ楽しむだけではなく、その活動にどのような価値があるのか、そのゲームにどのような意義がかくされているのかを解明しながら取り組むことが不可欠であり、振り返りの中での反省点や改善点が次時への新たな課題となつて、よりよい活動を生み出していくことにつながるからである。

(5) 学年クラスマッチの実際

本校は9月に運動会を実施するため、運動会後は子どもたちの学校生活が平板になりがちで、意欲面が希薄になることが多い。そこで、二学期始業式の学年集会の折に、11月にクラスマッチを行うということを全員に伝えた。競技種目はみんなで決めてもらう。ただしその条件は、『学級みんなで取り組めて、クラスの絆がより強まる内容であること』この条件のみを伝えた。ここで意味をもってくるのが前述の教師の『しかけ』である。一学期からクラスの集会係が企画する週1回のみみんなで遊ぶ昼休み企画「ミニ集会」で多くの種目を経験させてきたことが子どもたちの先行経験として多くの種目提案と選択肢を生むことになる。

(6) 学年学級会で決定された内容と実践

○クラスマッチのネーミングは「学年タイトルマッチ」

○子どもたちの発案で、チャンピオンベルトの制作が決定された。各クラスで作った3本のベルトを掛けての熱い戦いが展開された。

○選択されたゲーム

【いずれのゲームもクラスの絆がより強まると認定】

【クラスの半数のムカデで全員参加のリレー】

この勝負は3回行い順位の合計によって勝敗が決定された。3回勝負の理由は、1回勝負では、どのクラスも本当の実力が発揮できない事が考えられるということで合意形成された。

《このゲームの意義》

- ・学級全員の心をひとつにしないと前に進めない
- ・学級半数のリレーにした理由は、半数が手拍子でリズムをとりながら応援もできる。

【連続8の字大縄跳び】

挑戦回数は5回、その5回の中で一番多く跳べた回数のクラスが優勝

《このゲームの意義》

得意な人が苦手な人の背中を押して縄に入るアシストができる。全員が声を出して回数を数え盛り上がる。

【男女混合サッカー】

必ず全員がボールに触らなければ、負けになる。

《このゲームの意義》

昨年の学級集会で男子ばかりが楽しんで失敗の集会に終わったから、高学年になった今年は男女が協力し合って成功させたい。

6 成果

子どもたちは昼休みを利用しては、どのクラスも自分たちのベストタイムや連続最高回数の更新を目指して自主的に練習に励んだ。

本活動の成果として、どのクラスも子どもたちの絆は非常に強くなり、男女がとても仲のよい成熟したクラスに成長することができた。さらに、学年間で同じ価値観をもつことができたため、学級間の情報交換が盛んに行われるようになり、楽しい係活動の活性化やアイデアいっぱいの集会活動も展開されるようになった。また、委員会活動が消化型の活動に陥ることなく、各委員会の特性を生かした様々なイベント活動を展開し、楽しい学校づくりにも貢献した。

このように学年全体で同じ価値観のもと様々な活動を展開していくことで、子どもたちは、みんなでやればできるんだ！という意識を強くもつようになったのである。

集団の質と活動場面によって刻々と変わる子どもたち。その一人一人と集団全体に対して、そのつど行う評価と適切な言葉がけが前述のような子どもたちを育てることに繋がった。そこにある大切なものは、担任として子どもたちに寄せる期待である。それがどれほど子ども一人一人の意欲を伸ばし、もっている力を引き出すのか。それを再確認した実践活動であった。

7 課題

本稿のような実践を行う中には筆者なりの1年間の見通しをもったカリキュラムが存在する。同学年の先生方には常に言葉でそれを伝えることができるのだが、特別活動に興味をもち学級経営の核にすえて取り組もうとしている若い先生方に言葉としてだけでなく、目に見える形でどのように伝えるか。また、集団の質と場面によって刻々と変わる子どもたちとその集団に対するそのつど評価。そして適切な言葉がけの実際もいかにして伝えていくことができるかが課題である。

また、担任として子どもたちに寄せる期待が、どれほど子ども一人一人の意欲を伸ばし、もっている力を引き出すかについても、もっと伝えなければならない。しかし、それにはその子一人一人の伸びの可能性を見極めるダイナミックアセスメント（以下DA）の考え方が必要であると思う。特別活動を展開していく上では、望ましい集団活動を通して全てに取り組むのであるから、そこには常に質の高いインタラクションを求めたい。集団であるからこそ伸びるであろう一人一人の、学習可能性の幅の見極めを教師がいかに行えば、よりよい人間関係を築くことのできる集団ができるのか。そのDAの考え方を生かした実践を行い、その成果を若い先生方に伝えていくことも今後の課題である。

8 おわりに

本学級会では5年生なりに価値や意義を考えながらよりよい学級生活をつくろうと話し合う子どもたちの姿を数多く見ることができた。これは今までの学級会で、発言内容や考え方を見極め、そのつど評価し、子どもたちに価値づけて返しながら育ててきた子どもたちの育ちそのものであろう。

指導に生かす評価とは評定を行うことではない。今後も子どもたちの育ちと学習可能性を見極め、支援しながらさらに高みへと誘う評価活動を展開しながら、常に自分の指導技術の向上を目指す視点をもって学級活動の授業参観に臨み、よりよい授業づくりとよりよい学級づくりを目指していきたい。